

Document Citation

Title	Pilgrimage at night (Anya koro, 1959)
Author(s)	
Source	<i>Japan Society</i>
Date	
Type	program note
Language	English Japanese
Pagination	
No. of Pages	3
Subjects	
Film Subjects	Anyakôro (Pigrimage at night), Toyoda, Shirô, 1959

May 12

6:00 and 8:20 p.m.

~~**PILGRIMAGE AT NIGHT**~~ (Anya koro, 1959) 144 minutes, b&w

Produced by Tokyo Eiga. Print courtesy of Kawakita Memorial Film Institute. Directed by Shiro Toyoda. Screenplay by Toshio Yasumi based on the story by Naoya Shiga (1921-87). Photography by Jun Yasumoto. Music by Yasushi Akutagawa. Cast: Ryo Ikebe, Fujiko Yamamoto, Chikage Awashima, Minoru Chiaki, Tomoko Fumino, Nobuo Nakamura, Teruko Nagaoka. *Toyoda sensitively adapted Naoya Shiga's classic novel about the emotional turmoil of a man who suspects that his wife is committing adultery with his father.*

Japanese Literature On Screen: Part II is made possible in part through the generosity of the New York State Council on the Arts, and with the collaboration of Kawakita Memorial Film Institute.

Program notes: Kyoko Hirano and Akira Tochigi; *Program Assistant:* Merle Okada; *Promotion:* Caren Acker; *Box Office:* Natalie Brown; *Projectionist:* Sy Tucker.

Admission (lecture and film for one admission): Japan Society members, students and senior citizens, \$4.50; nonmembers, \$6.00. Japan Society members may order tickets in advance by calling the Box Office at (212) 752-3015. Tickets for nonmembers go on sale at 5:00 p.m. on the day of each screening. Information: (212) 752-0824

Program subject to change without notice.

May 12 6:00 and 8:20 p.m.

PILGRIMAGE AT NIGHT (Anya koro, 1959) 144 minutes, b&w.

Production: Tokyo Eiga (Kazuo Takimura).

Direction: Shiro Toyoda.

Screenplay: Toshio Yasumi based on the story by Naoya Shiga
(1921-37).

Photography: Jun Yasumoto.

Art Direction: Kisaku Ito.

Recording: Kenji Nagaoka.

Lighting: Yasushi Mori.

Music: Yasushi Akutagawa.

Cast

Kensaku Tokito---Ryo Ikebe

Naoko---Fujiko Yamamoto

Oei---Chikage Awashima

Nobuyuki Tokito---Minoru Chiaki

Kensaku's Mother---Tomoko Fumino

Kensaku's Father---Nobuo Nakamura

Aiko's Mother---Teruko Nagaoka

Kaname---Tatsuya Nakadai

Osai---Haruko Sugimura

Takai---Kazuo Kitamura

Ishimoto---Noboru Nakaya

暗 夜 行 路

東京映画＝東宝1959年作品

製作……滝村和男、佐藤一郎
 原作……志賀 直哉
 脚色……八住 利雄
 監督……豊田 四郎
 助監督……平山昭夫(晃生)
 撮影……安本 淳
 美術……伊藤 燕朔
 音楽……芥川也寸志
 録音……長岡 憲治
 照明……森 康
 題字……長興 善郎

<配 役>

時任謙作……池部 良
 妻 直子……山本富士子
 お栄……淡島 千景
 夏……仲代 達矢
 時任信行……千秋 実
 お才……杉村 春子
 謙作の父……中村 伸郎
 高井……北村 和夫
 石本……仲谷 昇
 永井老人……汐見 洋
 佐伯……三津田 健
 お仙……賀原 夏子
 愛子の母……長岡 輝子
 本郷の婆や……荒木 道子
 寺のかみさん……南 美江
 お由……市原 悦子
 廓の女……岸田今日子
 京都の医者……加藤 武
 水谷……小池 朝雄
 謙作の母……文野 朋子
 京の宿女中……加藤 治子
 尾道の婆さん……田代 信子
 看護婦……本山可久子

ワイド 10巻 (3840米) 9月20日

<かいせつ>

志賀直哉(1823~1971年)の不朽の名作であるこの原作は、1921年に連載されてから26年かかって完結したという、志賀の唯一の長篇小説でもある。作中では社会的、政治的事件が殆んど描かれていないので、どの時期の物語であるか定かでない。恐らく第一次世界大戦(1914~18年)の頃であろうというのが、志賀を師と仰ぐ阿川弘之の説である。しか

し、映画では最初にく大正末期>とタイトルで示している。

原作は<私小説>の典型を示すものであり、主人公の体験が主観的に記述されている。即ち、一人称に近い記述形式がとられている。映画でも、時折主人公のナレーションが入って一見一人称的とも思える演出であるが、物語が進むにつれて登場人物はみんなカメラの前では平等の位置づけにある事が分り、原作と映画の微妙で最大の違いもこの辺にあると言える。池部良が扮する主人公は志賀直哉その人に違いないが、原作中の主人公はかなり意志の強い人物であり、いわば男性的であった。しかし、映画ではかなり<青白きインテリ>といった風情が強く、出生の秘密にとらわれて女々しく悩む姿が強調されている。その代り、淡島の乳母や山本の妻という存在が重きをなしており、この辺にも豊田＝八住の女性重視の姿勢が見られる。

川端の名作<雪国>の映画化の後本作品まで、豊田は「夕凧」「負ケラレマセン勝ツマデハ」「駅前旅館」「男性飼育法」と喜劇ないしはそれに近い作品を発表した。恐らく「夫婦善哉」の粘着質の喜劇性に新しい分野を見出し、これらの作品で喜劇の色々な形式を試したのであろう。以後、本作品のような濃厚で風格ある文藝映画と、軽妙洒脱な喜劇的映画の二つの流れを追っていくことになる。

<あらすじ>

時任謙作には出生の秘密があった。謙作は、父がドイツ滞在中に母と祖父との間に生まれた子だった。幼馴染みの愛子との縁談がこわれたのもそれが原因だった。彼は放蕩を

重ねて、祖父の死後その妻であったお栄と二人で暮らしていた。やがて謙作はお栄を女として意識するようになった。年も上で、実際には父であった祖父と交渉のあったお栄に、そんな気持ちを抱くようになった自分をもてあまし、謙作は尾道への旅行を思いついた。彼はお栄との結婚の決心を兄の信行に書き送った。その時になって謙作は初めて出生の秘密を兄から知らされたのである。謙作の父はこの結婚話に激怒して反対し、お栄も謙作の申し出を固辞した。謙作は再び東京を離れた。京都に出かけて行った彼は、宿の近くに療養に来ている老人につき添う娘を見そめた。友人の高井や石本らの助力でその娘直子に結婚を申し込み、縁談はととのった。謙作夫婦は、京都南禅寺北の坊草葺屋根の新居に住んだ。その頃お栄は、従姉のお才の勧めで中国へ渡ったが、慣れぬ異国で盗難にあたり病気になるなりした。それを知った謙作は金を工面して送ってやった。謙作と直子の間に男の子が生まれたが生後間もなく丹毒で死んだ。ある日お栄から病状を訴える便りがあった謙作は朝鮮までお栄を連れ戻しに行った。帰ってみると直子の様子が少しおかしい。留守中に従兄の要が泊っていったという。二人の間に間違いがおこったことに謙作は悩んだ。一人鳥取へ出かけた謙作はコレラに罹って倒れた。急を聞いて直子は謙作の許に駆けつけ、彼は優しく直子を見つめ、彼女も謙作について行こうと心に誓った。

